

モノグラフ
中学生の世界
vol.19

©1985. 株式会社 福武書店 教育研究所 / 加藤智博・和田京子・犬島雅子
放送大学教授 深谷昌志

中学生の親子関係

～依存と自立の谷間で～



目次

特集 ● 父親と母親のとらえ方	2
調査レポート ● 中学生の親子関係～依存と自立の谷間で～	
はじめに	6
第I章 調査の要約とテーマ	
1. 調査の要約	7
2. テーマ設定	8
第II章 親に依存する子どもたち	
1. 親子のコミュニケーション	9
2. 身のまわりのこと	13
3. 何歳まで注意されたか	17
第III章 親の姿はどう変わったのか	
1. 親についての評価	21
2. 父のイメージ・母のイメージ	24
3. 昔の親と今の親	28
4. 親の助言は役立つか	32
第IV章 親子関係の変化	
1. 父親との関係の推移	33
2. 学年による変化	35
3. 親の力を越えられるか	39
第V章 越えやすい親・越えにくい親	
1. 高校生との対比	45
2. 高校生にとっての親	49
3. 越えにくい親の条件	52
4. 親としての自己像	54
まとめに代えて	57
資料 調査票見本および集計表	58

特集

父親と母親のとらえ方

放送大学教授 深谷昌志



引っぱり型の父となだめ型の母

本レポートでは、中学生の親子関係を問題にしようとしている。しかし、のちにふれるように、その姿は大きなさまがわりを示している。そこで、かつての親子関係がどうであったのかを、親の立場を中心にあらためて考えてみたい。

現在、家族社会学や発達心理学などの研究者が父親や母親を語る時、もっともポピュラーに引用されるのが、アメリカの社会学者、

パーソンズの理論である。

パーソンズは「道具的」instrumentalと「表出的」expressive という、なんとも訳しにくい概念を提唱している。この2つの概念は、パーソンズが、研究仲間のベールズとともに、小集団を対象とした共同研究を重ねる過程で見いだしたもので、何人かの人間が小さなグループを作って、なんらかの課題を解決しようというとき、そこには、目標をきめてメンバーを引っぱるタイプと、さまざまな不満をなだめるタイプという2つのリーダーが生ま

れるという。具体的には、職場でも趣味のサークルでもよいのだが、つねに新しい目標を提示して、みんなを駆り立てるのが「道具的」なリーダーの役割である。しかし、目標を達成しようとすれば当然、オーバー・ワークになったり、日のあたる場にいる者といない者との間のあつれき、あるいは、能力差に伴う葛藤が生じてくる。そうした不満を聞いてやり、メンバーの気持ちを柔らげてやるのが「表出的」リーダーの役割となる。

通常、リーダーシップという概念で、前者の役割を連想することが多い。しかし、パーソンズは「道具的」と「表出的」とは、ともに集団を維持するのに不可欠のリーダーなのだという。「道具的」リーダーのみの集団では、一時的に生産性が上がるにしてもメンバーの不満がうっせきして集団から脱落する者が生じ、集団内のモラルが低下していく。それに対し「表出型」リーダーの率いる集団は、和が保たれる代わりに、新しい目標が提示されないで、やる気に富んだメンバーが離落するだけでなく、活動が全体として停滞しマンネリ化していく。したがって「道具的」と「表出的」のリーダーが相互に役割を補充し合い、それぞれの機能を果たすとき、その集団は安定するというのである。

「道具的」という用語は、なんとも日本語になじみにくいから、思いきって意識すれば「引っぱり型」とでもいえば良いのだろうか。グループの先頭に立ち、目標を示してメンバーを動機づけるリーダーである。それに対し「表出的」は、メンバーの不満を聞き精神的なやすらぎを与える役割であるから、「なだめ型」と訳せばパーソンズの意に則しているかもしれない。

そしてパーソンズは「引っぱり型」（道具的）と「なだめ型」（表出的）という役割分化は、家族の中にもあらわれるとみて、右図のような図式を提出している。

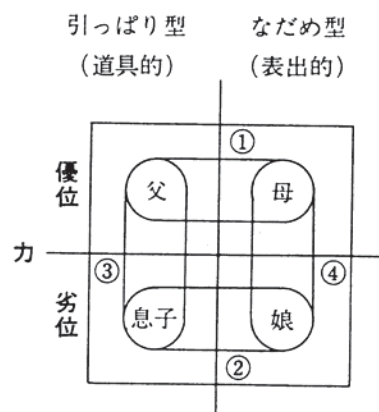
図から明らかなように核家族を例にすれば、

家族の中には、「おとなたち」（図中の①）「子どもたち」「男性たち」「女性たち」というような4つのタイプの下位の集団がある。そして、家庭内での力の優位・劣位という面で、おとなたちと子どもたちの分化が生じ、主たる役割が引っぱり型か、なだめ型かによって男子と女子との役割が分かれる。

そして、家族の中で「引っぱり型の力のある存在」が父親、「なだめ型の力のある存在」が母親となる。したがって、仕事にでて収入を得てくるだけでなく、社会と家庭との間のかけ橋となり、社会的な権威を身につけて、家族をひっぱっていくのが父親の役割で、家事や育児だけでなく家庭のメンバーの不満や悩みを聞いてやり、精神的な安定を与えるのが、母親の役割となる。

こうした人間関係の中で、息子は父を目標とし、父に近づこうとすることによって、男性らしさを獲得し、娘は母親の行動を模倣し

家族の役割構造
—パーソンズ図式—



注) ○の中に家族の中の下位文化

- ①=おとなたち
- ②=子どもたち
- ③=男性たち
- ④=女性たち

ながら、母と同じような女性らしさを身につけていく。したがって、両親と息子と娘とから構成されている家族があり、それぞれのメンバーが、期待される通りの役割を果たしているなら、その家族は安定しており、そうした家族の中で育つ子どもは、父親から生きる目標を与えられ、母親から充足感を得て、バランスのとれた成長をとげることができる。

自動車の運転にたとえるなら、父親がアクセル役を、母親がブレーキ役を果たしつつ、両者のバランスの上に、家庭生活が進展していくという図式である。

役割の分化は普遍的なのか

パーソンズ以外にも、小集団や家族の研究などを通して、2つのリーダーシップの存在を指摘している学者は多い。例えば、経営学者のバーナードは「経営者の役割」の中で、「有効性」effectivenessと「能率」efficiencyという概念を提出している。この2つのうち「有効性」は目的達成の観点から、「能率」が充足感の側面からとらえられているので、パーソンズのいう「道具的」と「有効性」、「表出的」と「能率」との概念は類似している。

また、グループ・ダイナミックスの研究で知られる三隅二不二氏も、集団の目標達成を目的とする「遂行」(performance)する機能と成員の精神的な安定を図り、集団を「維持」(maintenance)する機能とが、グループの形成に不可欠だと指摘している。この場合の遂行と維持も、パーソンズの「道具的」・「表出的」と、基本的な発想を同じくしている。

また、ユング派の心理学者・河合隼雄氏は、『母性社会日本の病理』の中で、母性の原理を「包含する」、父性を「切断する」としてとらえている。すべての子を無条件で愛し、限りなく受け入れ、包み込むのが母性だとするならば、善悪や優劣のけじめをはっきりとさ

せ、劣った子を切りすて、秀れた子を抜き替えるのが父性原理だという。こうした発想をさらに発展させ、河合氏は母性を平等主義、父性を能率主義として要約し、現代を父性の失われた母性優先の社会だとみて、示唆に富む日本社会論を展開している。

先に紹介したパーソンズの図式は、アメリカの社会学者が、さまざまな家族を念頭に置いて作ったものだけあって、一般論としての説得力をもってはいるが、やや抽象的すぎて、人間の心情などが脱落しているような印象を受ける。それに反し、河合氏の論旨は精神科医の目を通した人間観をふまえており、心のひだにしみ通る思いがする。

その他、母親の役割行動が、文化の違いを越えて共通しているのに、父親の役割はその社会により違いが大きいという文化人類学者マーガレット・ミードの指摘や、出産や育児のような直接的な接触をもたないから、父親の存在は、イマジネーションの産物であるというフロイドの理論もある。

いずれにせよ、これらの両親論は、父親と母親とを対比の中でとらえ、その違いを明確にすることによって、父親らしさと母親らしさを抽出しようとする立場を共通にふまえている。そして、すでにふれたように、過去に基準を求めるなら、そうした理論は、かなりの妥当性をもつといわねばならない。出生してからのしつけ、教育、将来の進路が、男子と女子とで、まったく異なっていたのであるから、そして、男子は社会的な権威をもつように、女子は家庭を守るようにしつけられてきたのであるから、そのように育てられた男女が結婚し、父親と母親になれば、父親が「道具的」になり、母親が「表出的」な態度をとるのも当然であろう。

『タテ社会の人間関係』の著者として知られる中根千枝氏は、文化人類学的な見識をふまえて、父権の成り立つ基盤が、

- ① 父の仕事が息子が継ぐこと

② 家族の構成人数が多いこと

であるといっている。たしかに、職業の世襲が可能であって、父のもつ技術や知識が息子に伝達できるのであるなら、父親の権限は強まってこよう。また、大家族制度のもとでは、家庭の運営にさまざまな決定や判断を伴うから、父親の出番が多くなろう。それと同様に、母親の地位や役割の固定化を促がした要因も少なくない。そこでごく簡単に、父親と母親との役割分業が成り立った背景を概観しておくことにしよう。現在でも、狩猟民族の間では、父親が狩りにでて獲物を取り、母親は、住まいの近くに残り、家事や育児に従事しつつ、父親の帰りを待つ生活を送っているといわれる。

日本の場合でも、士族の社会では、男子の家督相続制が厳密に守られていたから、女性は嫡子を産むための存在としての評価を与えられがちであった。加えて、男性を「天」、女性を「地」とみるような朱子学思想が浸透していたから、士族の家庭では、父親と母親との役割が明確に分離していたのみでなく、母親というより女性は、父親に従属する生活を送っていた。「子なきは去る」に象徴される「七去」、「嫁しては夫に従い」の「三従」などの教えが、たてまえとしてではなく、現実の生活倫理として機能していたのである。

もちろん、明治維新を迎えて士族社会の風習は急速に失われていったが、明治時代を担った高級官僚たちが、下級が多いとはいっても、士族出身で占められていたために、士族の流れをくむ父親像は大きな変貌をとげることなく、明治はむろん大正や昭和へとうけつがれることになった。

現在でも、父親の理想像のひとつに、無口で、感情をあらわにせず、毅然たる態度をとる男性の姿がある。そうした父親像の系譜を求めていくと、士族の文化に到達する可能性が強い。

こうした士族の父親像とは別に、もうひとつ庶民の父親像とが考えられる。庶民のモデ

ルを、どこに求めるのかはむずかしいところだが、農民の場合、農作業を統轄する父親の権限、つまり「トトザ」と、家庭内のきりもりをする母親の権限、つまり「カカザ」とを分離する習慣があった。もちろん、女性たちも農作業に従事しているが、それとは別に主婦権が認められていたのである。

地域によって呼び名が異なるようだが、その家の農業を経営する実権が、父親から息子へゆずり渡されるとき、それと併行して家政をきりもりする実権が、姑から嫁へ移動する「杓子わたし」が行われる。

杓子とは、当世風にいえばご飯のもりつけを行うしゃもじにあたる。そして、杓子わたしをされた翌日から、嫁はその家の主婦となり、家政の権限のすべてを握る。なにしろ、塩や鉄、油などを除く生活用品を、家庭の中で自給自足していた時代である。特に冬場の長い、東北や日本海辺などでは、主婦の力量は一家の生死の鍵すら握っていた。

冬場でも冠婚葬祭はあるから、そうしたときのために材料を貯えておく必要があるし、そうでなくとも長い冬を乗りきるのに、食料や燃料を計画的に使わねばならない。主人が勝手に、米びつをあげ、ぜいたくな食事を始めたのでは、冬場をしのげないのである。したがって、伝統的に家政をきりもりする主婦の権限は「カカザ」として保証され、主人といえどもそれを犯すことはできなかった。

そうした形で長い間、父親と母親との役割分化が定着していた。しかし、ここ20年来、家庭をめぐる状況が大きく変わった。イエ制度が崩壊しただけでなく、カカザやトトザも実態を失っている。家庭環境がそれほど変わっているのに、われわれは父や母を語るとき、ともすると、古い見方をすてきれていない感じがする。そこで父や母のあり方を探るためにも、現実をありのままに見る必要が生ずる。そうした意味で、以下、中学生の親子関係の実態にせまっていくことにしたい。

調査レポート

中学生の親子関係

～依存と自立との谷間で～

はじめに

中学生という年齢は、成長の過程の大きな節目を形成している。これまで、親に依存していた子どもが、親の許を離れて自立していく。そうした依存から自立への谷間の時期が中学生の時代である。

もっとも、中学生になったからといって、一足とびに自立できるわけもないから、子どもたちは家庭の中で、いわば、からにこもった感じで親に反発しつつ、自立の期が熟するのを待つ。そうした意味では、依存から自立への過渡期の産物が第二次反抗期であり、それだけに、反抗期の姿は自立の程度を測るバロメーターとして重みをもつ。

このような問題意識から、中学生の親子関係を両親の変貌を視野に入れつつ分析しようとしたのが、本報告書である。流動しつつあるテーマだけに、自信のない部分も少なくないが、一応のまとめを試みたつもりである。読者諸氏の声をお待ちしたい。

昭和60年1月

放送大学教授 深谷昌志

第 I 章 調査の要約とテーマ



1. 調査の要約

①親に依存する子

中学生の親子というと、第二次反抗期を連想する。しかし、

両親とよく話をする (P. 10 表 2)

身のまわりは親がかり (P. 14 表 5)

親の接し方は変わっていない (P. 18 表 9) など、親と仲むつまじく、親に依存する子の姿がうかんでくる。

②存在感がある親

子どもたちにとって、親は大きな存在としてうつつている。

両親に対する評価 (P. 22 表 13)

父母のイメージ (P. 25 表 15)

などが、その例証となる。

事実、親の助言は役立つと思っている子が多い (P. 32 表 19)。

③親離れは学年とともに

学年が上がると、親離れの気配も生まれる。そして、中 1 から中 3 になるにつれて、表 21 (P. 34)、表 22 (P. 35)、図 7 (P. 36) など親を絶対視する態度は薄れてくる。

④越えにくい親

しかし、親の力がしっかりしているので、反発をしつつも親を越えにくい (P. 40 表 26)。

⑤高校生との対比

大きな親の存在を越えにくいという状況は程度の差こそあれ、中学生だけでなく、高校生についても認められる (P.46 表30)。

12 (P.51) の高学歴の親についても同様である。

〔まとめ〕

親に反抗しつつ自立する形に代わって、親の許で、親と共存しつつ自立していくスタイルが一般的になりはじめている。

⑥子どもを越えさせる親

表34 (P.53)、図14 (P.53) など、良き親の許では、子どもは親を越えにくくなる。図

2. テーマ設定

中学生の親子関係というと、第二次反抗期の存在がイメージにうかんでくる。とくに一昔前まで、親を相手として嵐のような激しい反抗をくりひろげるのが、中学生の姿だったように考えられる。

しかし、このところ、中学生になっても親と仲むつまじく暮らしている子どもが少なくないような印象を受ける。そして、仮にそうした反抗期のなさが、中学生の間で、広く認められるのだとしたら、これまで親への反抗を媒介として、子どもは自立していくと考えられてきただけに、反抗期のなさは子どもたちの精神的な自立が遅れていることを意味していよう。

そこで、第二次反抗期の喪失が実際に認められるのか。そして、仮に、そうした事実が

認められるとしたら、その背景は何なのか。そして、その結果として、子どもたちの成長に、どのような歪みが生じるのか。それらを考えようとしたのが、本報告書である。

サンプルは、表1の通りで、中学生と親、約1,400名である。子どもたちには、学校でアンケートへの記入を求め、親たちには、父親と母親のそれぞれ別の質問票を用意し、家庭で記入してもらい、学校経由で回収する形をとった。なお、中学生との対比を試みるため、高校生の親子にも、中学生と共通する部分の多い調査票を配布して調査を実施したが、その結果は、本モノグラフ・シリーズの高校生版である『モノグラフ・高校生 '84 vol.13「高校生の親子関係」』にくわしいので、同レポートを参照してほしい。

(表1) サンプル構成

(人)

	子 ども	父 親	母 親
中 学 生	1,323	1,405	自 営 221
			主 婦 499
			ホワイ カラー 250
高 校 生	1,578	1,217	つとめ 617
			主 婦 480
			自 営 302
	中1 408 中2 466 中3 449		1,405 主 婦 499 パート 418
	高1 530 高2 1,048		1,214 主 婦 480 パート 314

第II章 親に依存する子どもたち



1. 親子のコミュニケーション

反抗期の実態にふれるにあたって、まず、親子の間のコミュニケーションの姿に目を向けてみよう。

表2は親と話す程度を示しているが、母親と「よく話す」割合は7割に達しているし、父親との間でも、「ときどき」を含めると、8割の子どもたちが、父親と話していると答えている。したがって、このデータからだけでも、反抗期というより、むしろ家の中で仲むつまじく語り合っている親子の姿がうかんでくる。

しかし、これだけでは、どんな内容の話をしているのかわからないので、話をしている内容に着目すると、表3(図1)の通りとな

る。子どもたちが話をしているという割に、それほど話をしていない領域があるのが目につく。もっとも、ヒット中の音楽やテレビのギャグなどは、世代によるずれが大きいであろうから、そうした話題は、友だちとかわしたほうが楽しかろう。したがって、親と話をしているのは「勉強の成績」や「友だちのこと」など、学校のできごとが多い。しかし、「わりと」を含めると、学校のできごとを、父親と話している子が4割に達しているし、母親とも6割が話しているから、全体としてみれば、親子の間のコミュニケーションはスムーズに展開していると考えられよう。

なお、表4に、そうしたコミュニケーショ

ンに親子間のずれが認められるかどうかをまとめてみた。子どもとしては、父親に学校のことを話しているつもりなのに、父親のほうは話しているとは思っていない。あるいは、母親は子どもとプロ野球やテレビのギャグを話しているつもりなのに、子どものほうは、母親とそういう話をしているつもりはないな

ど、領域により、親と子の感じ方に多少のずれが認められる。しかし差の項目が示すように、コミュニケーションについての親子の感じ方はほとんど一致している。したがって、学校でのできごとを中心に親と話していることが多いという気持ちは、子どもだけでなく、親の間にも定着しているように考えられる。

(表2) 両親と話しているか

→よく話をする 父親と4割、母親は7割

(%)

			話している		話さない	
			よ く	ときどき	あまり	ほとんど
父 親 と	男 子	中 1	47.4	37.7	11.2	3.7
		2	54.5	28.6	14.3	2.6
		3	34.9	41.4	15.7	8.0
	女 子	中 1	51.6	37.8	6.9	3.7
		2	41.0	36.2	15.5	7.3
		3	33.0	41.2	15.5	10.3
全 体		43.6	37.0	13.4	6.0	
母 親 と	男 子	中 1	69.8	25.6	2.7	1.9
		2	68.1	25.4	3.9	2.6
		3	54.6	35.2	5.7	4.5
	女 子	中 1	83.3	15.2	1.0	0.5
		2	79.2	14.3	3.9	2.6
		3	80.9	13.1	3.5	2.5
全 体		71.9	22.0	3.8	2.3	

(表3) 両親と何を話しているか

→学校でのできごとを中心に

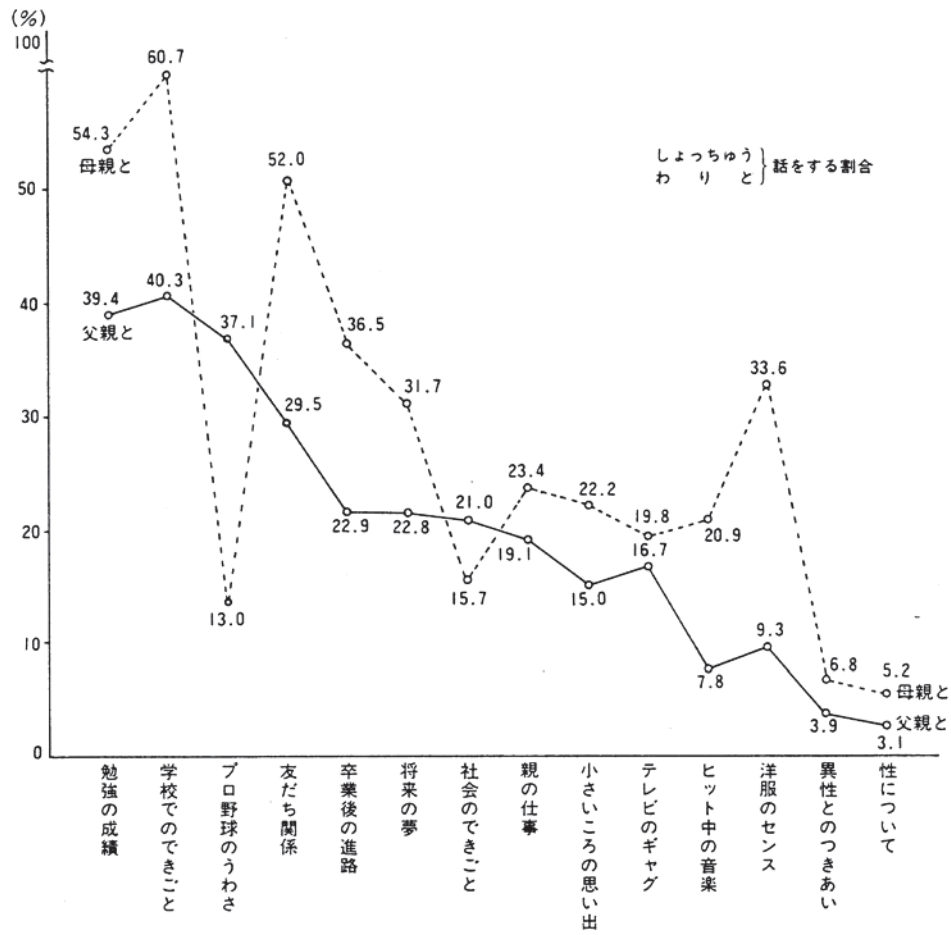
(%)

			話している			話していない		
			しょっちゅう	わりと	たまに	あまり	ほとんど	まったく
父 親 と	1	勉強の成績	13.6	25.8	33.5	13.0	7.3	6.8
	2	学校でのできごと	15.8	24.5	24.8	13.0	10.9	11.0
	3	プロ野球のうわさ	19.8	17.3	18.6	11.1	11.6	21.6
	4	友だち関係	10.8	18.7	25.9	17.8	14.4	12.4
	5	卒業後の進路	6.0	16.9	33.8	15.2	15.2	12.9
	6	将来の夢	6.3	16.5	27.6	18.8	16.7	14.1
	7	社会のできごと	5.9	15.1	23.5	19.1	17.5	18.9
	8	父親の仕事	4.7	14.4	25.2	19.8	16.7	19.2
	9	小さいころの思い出	4.3	10.7	23.8	19.4	22.0	19.8
	10	テレビのギャグ	5.2	11.5	17.5	16.6	21.0	28.2
	11	ヒット中の音楽	1.9	5.9	18.4	17.1	26.1	30.6
	12	洋服のセンス	2.4	6.9	14.6	19.2	22.6	34.3
	13	異性とのつきあい	1.7	2.2	6.5	9.7	17.2	62.7
	14	性について	1.2	1.9	3.9	9.7	16.4	66.9
母 親 と	1	勉強の成績	24.2	30.1	28.9	8.8	4.3	3.7
	2	学校でのできごと	32.4	28.3	21.5	7.5	5.7	4.6
	3	プロ野球のうわさ	5.1	7.9	12.4	13.1	19.6	41.9
	4	友だち関係	23.7	28.3	23.5	11.9	6.1	6.5
	5	卒業後の進路	12.2	24.3	29.9	14.1	11.2	8.3
	6	将来の夢	11.2	20.5	28.8	16.5	13.1	9.9
	7	社会のできごと	4.3	11.4	21.4	19.8	19.9	23.2
	8	親の仕事	7.6	15.8	24.5	18.3	16.6	17.2
	9	小さいころの思い出	7.2	15.0	26.3	18.3	17.0	16.2
	10	テレビのギャグ	7.2	12.6	20.0	19.8	18.0	22.4
	11	ヒット中の音楽	6.1	14.8	23.1	15.5	18.6	21.9
	12	洋服のセンス	12.5	21.1	22.8	14.2	12.7	16.7
	13	異性とのつきあい	2.5	4.3	9.0	11.9	16.9	55.4
	14	性について	2.0	3.2	8.6	11.7	16.2	58.3

○は最頻値

(図1) 両親とどれくらい話をするか

→ まあ話をしている程度



(表4) 両親と話している(親の評価と子どもの評価とのずれ)

→親と子とで開きは少ない

(%)

	父 親 と			母 親 と		
	子ども (A)	父 親 (B)	差 (A-B)	子ども (A)	母 親 (B)	差 (A-B)
勉強の成績	39.4	33.2	6.2	54.3	56.1	-1.8
学校のできごと	40.3	28.7	11.6	60.7	61.3	-0.6
プロ野球のうわさ	37.1	31.7	5.4	13.0	31.8	-18.8
友だち関係	29.5	22.6	6.9	52.0	56.0	-4.0
卒業後の進路	22.9	27.7	-4.8	36.5	37.3	-0.8
将来の夢	22.8	20.3	2.5	31.7	30.4	1.3
社会のできごと	21.0	17.5	3.5	15.7	23.7	-8.0
親の仕事	19.1	18.6	0.5	23.4	29.7	-6.3
小さいころの思い出	15.0	24.1	-9.1	22.2	37.3	-15.1
テレビのギャグ	16.7	15.5	1.2	19.8	30.6	-10.8
ヒット中の音楽	7.8	8.0	-0.2	20.9	24.0	-3.1
洋服のセンス	9.3	6.6	2.7	33.6	31.3	2.3
異性とのつきあい	3.9	3.4	0.5	6.8	8.9	-2.1
性について	3.1	2.8	0.3	5.2	7.4	-2.2

「しょっちゅう・わりと」話している割合
 A = 子どもが話していると思っている割合
 B = 親が話していると思っている割合

2. 身のまわりのこと

このように、親子関係のコミュニケーションは、反抗期というにしては、仲のむつまじさが目につく。それでは、行動のレベルで、子どもたちは、親から、どの程度、自立した生活を送っているのだろうか。

表5は、身のまわりの生活習慣を、子ども

たちがどの程度、自分でしているのかを示しているが、表中の数値が示すように、子どもたちが自分でしているのは、「焼魚の身をむしること」や「机の上のかたづけ」、「耳の穴のそうじ」くらいに限られている。そして、「部屋のそうじ」や「自分の食器のあとかた

(表5) 身のまわりの生活習慣

→自分するのは机の上のかたづけをするくらい

(%)

項目	尺度	いつも親	ほとんど親	ほとんど自分	いつも自分
焼魚の身をむしること		4.5	4.9	11.0	79.6
机の上のかたづけ		0.8	8.3	26.6	64.3
耳の穴のそうじ		16.0	14.2	16.4	53.4
部屋のそうじ		7.8	26.8	34.3	31.1
自分の食器のあとかたづけ		23.6	38.4	15.2	22.8
制服の手入れ		41.2	28.1	15.2	15.5
ふとんを干すこと		41.7	33.7	13.2	11.4
運動着の洗たく		58.2	26.4	7.9	7.5
下着の洗たく		59.6	26.6	7.4	6.4

○は最頻値

づけ」など、子どもが当然していなければならない行動についても、親まかせの生活を送っている。

しかも、表6や図2から明らかなように、例えば、「部屋のそうじを自分でしている」と子どもの65%は思っているのに、親でそう思っているのは43%のように、子どもが思っているほど、身のまわりのことをしていないと、親たちは答えている。もっとも、子どもはしているつもりだが、親の目からすると、それほどしていないというのは、立場の相違で、そういう差がある程度生じるのは避けられない

のであろう。

なお、表7によると、中1から中2、中3と、学年が上がるにつれて、自分のことを自分でしている子の割合が高まってはいるが、それは、あくまで、中1との対比の中でとらえたときの問題で、全体としてみると、子どもたちが中3になっても、自分のことを自分でしていないのが目につく。中3になっても部屋のそうじを自分でしている子どもが3～4割で、その他の子は、親まかせの生活を送っているというのが、その具体例であらう。

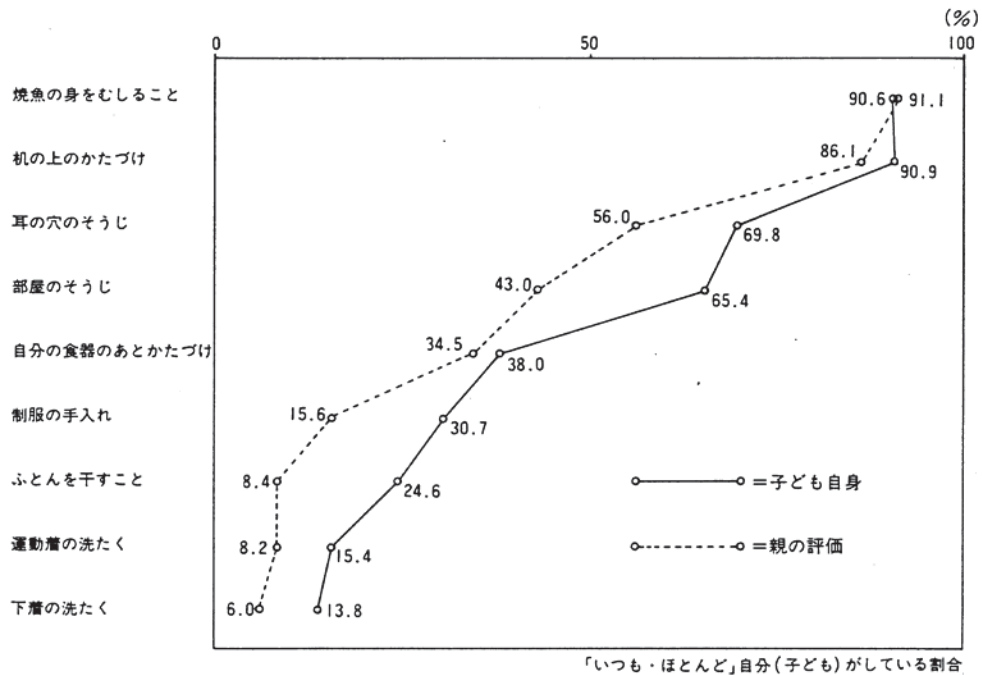
(表6) 身のまわりの生活習慣 (親の評価)

(%)

項目	いつも親	ほとんど親	ほとんど子ども	いつも子ども
焼魚の身をむしること	2.4	6.5	31.4	59.7
机の上のかたづけ	1.1	12.8	51.4	34.7
耳の穴のそうじ	19.8	24.2	22.6	33.4
部屋のそうじ	15.2	41.8	31.3	11.7
自分の食器のあとかたづけ	20.2	45.3	20.9	13.6
制服の手入れ	50.5	33.9	10.4	5.2
ふとんを干すこと	57.1	34.5	5.8	2.6
運動着の洗たく	58.9	32.9	5.6	2.6
下着の洗たく	60.4	33.6	3.9	2.1

(図2) 身のまわりの生活習慣——親子のずれ——

→子どもが思うほどしていない



(表7) 身のまわりの生活習慣×学年・性

→学年が上がると、自立の割合が高くなる

(%)

学年・性 項目	男 子			女 子		
	中 1	中 2	中 3	中 1	中 2	中 3
焼魚の身をむしること	75.5	82.3	84.7	74.5	78.4	80.8
机の上のかたづけ	44.0	62.2	68.3	60.7	71.7	78.3
耳の穴のそうじ	38.0	48.3	67.2	40.8	59.2	63.6
部屋のそうじ	17.8	28.6	35.2	22.5	40.3	40.7
自分の食器のあとのかたづけ	20.9	22.5	21.6	24.1	22.3	26.1
制服の手入れ	2.8	7.3	6.8	20.1	27.0	31.8
ふとんを干すこと	9.7	8.6	13.3	9.5	13.8	13.1
運動着の洗たく	1.9	3.4	4.8	10.0	13.8	12.1
下着の洗たく	1.9	2.6	2.8	5.8	10.0	16.0

「いつも」自分でしている割合

3. 何歳まで注意されたか

このように、中学生になっても、子どもたちは、親に身のまわりの世話をしてもらいながら、家庭の中で、親とあれこれと話す生活を送っている。こうした状況は、これが小学生のデータなら、ほほえましいし、望ましいものであろう。しかし、中学生の親子関係にしては、なんとなく幼さを感じる。

そこで、中学生になってから、親の接し方が変わったと思うか尋ねてみた。表8によると、中学生になり「意見を聞いてくれたり」、「責任をもたせてくれる」ことが多くなったような気がする。しかし、その他の面は、中学生になったからといって、特に扱いが変わったことはないという。そして、表9の結果では、中3になっても、そうした扱いにほとんど変化を認めにくい。

しかし、表9の結果は見方によれば、子どもたちの行動がしっかりしているので、中学生になったからといって、それほど注意する必要はないためとも考えられる。

そこで、いくつかの項目を示して、何歳ごろまで注意されたかを尋ねると、表10の通りとなる。すなわち、「友だちと仲良く」や「危ないことをやめて」、「人にあいさつをしない」などは、子どもどころ言われてはいたが、今は言われなくなったという。しかし、子どもたちが、今も言われていることの4位までを、以下のような内容が占める。

- | | | |
|---|--------------|-------|
| 1 | テレビばかり見ていないで | (49%) |
| 2 | 朝早く起きなさい | (45%) |
| 3 | 机のまわりをきちんと | (42%) |
| 4 | 言葉づかいに気をつけて | (42%) |
- (今も言われている割合)

いずれも、小学低学年生の子どもでも言われそうな内容で、そんなことを中学生が言われているとは思えないが、表中の数値によればそうしたことを今も言われているだけでなく、表11の通り、中1よりむしろ、中3のほうが、そうした注意を言われている者が多いという。中3の場合、高校入試が迫ってきて、家庭でのしつけが、やや甘くなっているのか、それとも大きくなって親の言うことを聞かなくなったためであろうか。

そして、表12は、子どもたちが親からどんな評価を受けていると思うかをまとめたものだが、健康に自信があるし、その他の面でも、まあまあの子供と思われているはずだ。しかし、親の目からすると、勉強の意欲に欠けると言われるかもしれないと、子どもたちは思っている。

ともあれ、子どもたちは、甘えるという感じで、家庭の中で生活しており、残念ながら、そうした姿は自立というには依存性の大きさが目につく。

(表8) 親の接し方が変わったか

→あまり変わっていない

(%)

項目	尺度		そうならない	
	とても	わりと	あまり	ぜんぜん
責任をもたせてくれるようになった	10.3	43.3	36.4	10.0
いっしょにいることが少なくなった	15.3	33.9	33.2	17.6
期待をかけるようになった	10.6	35.6	41.0	12.8
意見を聞いてくれるようになった	9.6	38.2	37.7	14.5
口やかましくなった	15.0	26.0	41.9	17.1
きびしくなった	10.8	29.9	44.9	14.4
おとな扱いをしてくれるようになった	4.9	26.4	46.0	22.7
やさしくなった	3.3	19.3	56.0	21.4
何も言わなくなった	3.7	25.6	42.2	28.5
信頼してくれるようになった	6.4	38.3	41.7	13.6

○は最頻値

(表9) 親の接し方が変わったか×学年・性

→学年が上がっても変わらない

(%)

項目	性		学年		
	男子	女子	中1	中2	中3
責任をもたせてくれるようになった	11.6	8.2	10.9	8.9	10.4
いっしょにいることが少なくなった	13.9	21.8	19.5	18.2	15.2
期待をかけるようになった	12.6	13.0	13.0	13.7	11.6
意見を聞いてくれるようになった	16.8	12.0	14.4	13.8	15.4
口やかましくなった	15.8	18.5	21.1	19.0	11.4
きびしくなった	13.6	15.3	16.5	15.6	11.2
おとな扱いをしてくれるようになった	23.3	22.1	26.8	20.7	21.3
やさしくなった	22.2	20.6	20.5	22.5	21.2
何も言わなくなった	28.1	29.1	30.9	25.3	29.7
信頼してくれるようになった	14.4	12.7	13.1	12.4	15.2

中学生になっても「ぜんぜん」接し方が変わらない割合

(表10) 何歳まで注意されたか

→今も、言われている

(%)

項目	尺度	言われていない(何歳まで言われた)				今も言われている
		小1～2まで	小3～4まで	小5～6まで	中1まで	
友だちと仲良く		41.8	22.6	14.7	5.5	15.4
危ないことをやめて		26.8	24.7	22.9	7.5	18.1
人にあいさつをしなさい		27.3	23.8	20.6	8.7	19.6
物を大切に		19.7	20.8	23.1	7.8	28.6
先生のいうことを聞く		18.8	19.5	21.2	10.4	30.1
忘れ物をしないように		14.0	20.6	22.4	10.6	32.4
朝早く起きなさい		14.8	17.1	16.3	7.0	44.8
言葉づかいに気をつけて		14.9	13.2	19.4	10.9	41.6
机のまわりをきちんと		11.5	13.7	21.4	11.1	42.3
テレビばかり見ていないで		9.6	10.3	19.9	11.1	49.1

○は最頻値

(表11) 今も注意されているか

→中3のほうがむしろ注意されている

(%)

項目	学年・性	男 子			女 子		
		中 1	中 2	中 3	中 1	中 2	中 3
友だちと仲良く		15.7	11.4	10.7	20.6	19.4	16.2
危ないことをやめて		23.0	22.0	17.9	11.9	17.6	14.8
人にあいさつをしなさい		16.5	15.4	22.1	19.4	18.5	26.0
物を大切に		25.4	28.3	31.0	27.2	24.7	35.9
先生のいうことを聞く		28.9	28.1	28.5	28.8	29.5	38.5
忘れ物をしないように		35.3	30.7	30.1	37.8	30.0	31.3
朝早く起きなさい		35.6	34.8	57.0	40.3	44.9	54.9
言葉づかいに気をつけて		26.1	27.6	34.2	45.4	54.5	66.0
机のまわりをきちんと		41.9	40.4	46.5	40.5	37.0	48.0
テレビばかり見ていないで		45.9	39.4	52.9	48.4	52.0	57.6

「今も」注意されている割合

(表12) 両親からどう思われているか (子どもの評価)

→健康だが、意欲に乏しい

(%)

		ある (良い)			欠ける (悪い)		
		とても	かなり	やや	やや	かなり	まったく
父 親 か ら	健康	36.7	24.0	20.8	13.2	2.8	2.5
	友とのつきあい	23.0	27.1	35.4	9.0	2.6	2.9
	性格	10.8	17.6	39.9	22.9	4.0	4.8
	生活態度	6.3	14.4	35.8	30.0	6.9	6.6
	数学の成績	10.2	14.9	24.3	22.8	14.9	12.9
	英語の成績	9.2	14.5	23.0	23.1	15.6	14.6
	性的魅力	6.2	8.3	31.2	27.3	11.4	15.6
	勉強の意欲	4.2	9.6	26.0	33.6	15.0	11.6
母 親 か ら	健康	35.2	24.3	21.9	13.1	2.8	2.7
	友とのつきあい	24.7	25.7	35.1	9.2	2.8	2.5
	性格	11.5	19.2	42.3	19.3	3.5	4.2
	生活態度	6.1	13.7	33.1	33.3	6.8	7.0
	数学の成績	10.0	14.8	24.1	22.6	14.7	13.8
	英語の成績	8.6	15.4	23.4	22.4	14.7	15.5
	性的魅力	6.0	9.4	34.2	28.1	11.1	11.2
	勉強の意欲	5.1	9.2	26.6	31.9	15.2	12.0

○は最頻値

第III章 親の姿はどう変わったのか



1. 親についての評価

今までふれてきたように、家庭の中の中学生たちは、小学生のころと同じように、親に依存し、いかにも子どもらしい感じで毎日を過ごしている。当然、そこには反抗期の存在を認めたいが、子どもたちは、そうした親について、どのような見方をしているのだろうか。

表13 (図3) は両親がどんなタイプなのかを尋ねたものだが、

- | | | |
|----|---|------------------|
| 父親 | { | 1 仕事に意欲的に取り組んでいて |
| | | 2 専門の知識もしっかりしており |
| | | 3 社会的な教養もある男性 |
| 母親 | { | 1 家事の腕前がしっかりしていて |
| | | 2 子どもへの愛情もあり |
| | | 3 社会的な教養もある女性 |

が、子どもたちの抱く両親像で、つきつめて

いうと、仕事に意欲をもつ父、愛情をもって家をきりもりする母という感じで、こうした両親像は、子どもにとって理想に近いもののように思える。

したがって、表14のように、親自身は親として決して悪い親とは思っていないし、むしろ、やや良い親だろうと信じている。しかし、子どもたちの目は、親が考えている以上に親に高い評価を与えている (図4)。

つまり、父も、そして母も、子どもへの愛情については自信を抱いている。しかし、その他の面では、それほど良い親ではないと思っているのに、父親、そして、母親は、それぞれに性的な魅力に富み、そして、服装のセンスもまずまずだと、子どもたちは感じている。そうした意味で、中学生たちが親たちに理想に近いおとな像といった感じのイメージを抱いているのがわかる。

(表13) 両親に対する評価

→全体に評価が良い

(%)

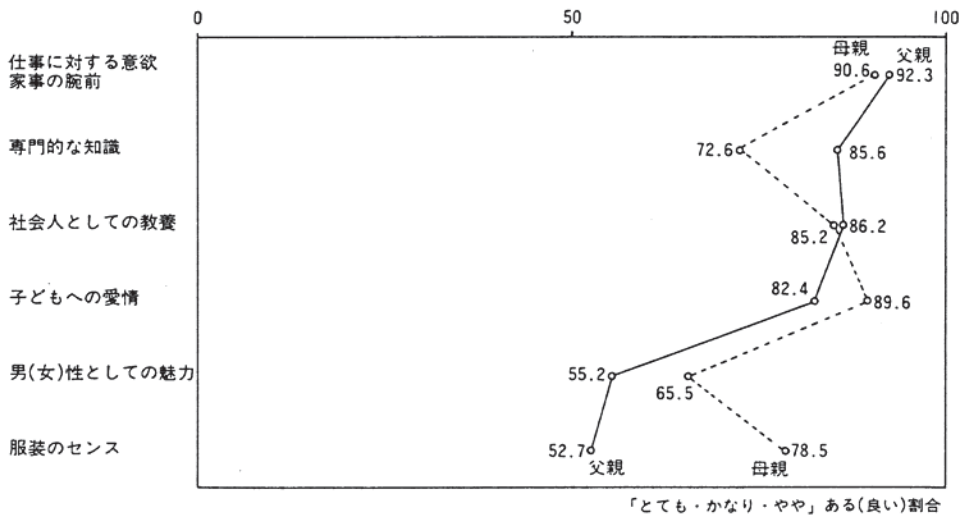
		ある (良い)			欠ける (悪い)		
		とても	かなり	やや	やや	かなり	まったく
父 親	仕事に対する意欲	44.5	30.9	16.9	4.5	1.0	2.2
	専門的な知識	30.6	29.2	25.8	7.4	3.5	3.5
	社会人としての教養	29.0	28.6	28.6	8.4	2.5	2.9
	子どもへの愛情	28.6	27.6	26.2	10.1	2.6	4.9
	男性としての魅力	7.8	11.4	36.0	22.4	10.9	11.5
	服装のセンス	7.1	8.0	37.6	27.3	10.5	9.5
母 親	家事の腕前	38.8	31.2	20.6	6.4	1.0	2.0
	専門的な知識	15.4	21.0	36.2	18.7	4.5	4.2
	社会人としての教養	21.3	26.5	37.4	10.1	2.1	2.6
	子どもへの愛情	35.3	29.3	25.0	5.7	2.1	2.6
	女性としての魅力	10.6	15.3	39.6	21.5	7.0	6.0
	服装のセンス	14.7	23.2	40.6	15.1	3.5	2.9

○は最頻値

(図3) 両親に対する評価

→知識の父・センスの母

(%)



(表14) 子どもからどう思われているか(親の評価)

→ ややある(良い)というくらい思っているだろう

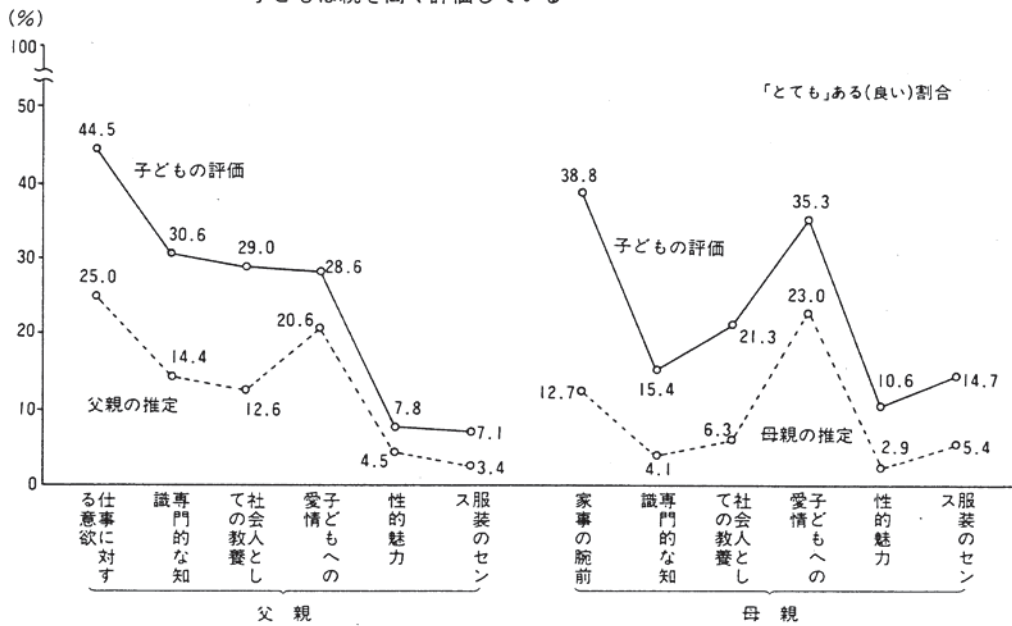
(%)

		ある(良い)			欠ける(悪い)		
		とても	かなり	やや	やや	かなり	まったく
父 親 は	仕事に対する意欲	25.0	42.9	27.4	3.6	0.3	0.8
	専門的な知識	14.4	31.5	39.5	9.6	2.5	2.5
	社会人としての教養	12.6	31.1	46.0	7.8	1.1	1.4
	子どもへの愛情	20.6	36.6	34.6	6.0	1.1	1.1
	男性としての魅力	4.5	16.2	53.0	18.7	4.1	3.5
	服装のセンス	3.4	9.5	51.5	24.2	6.3	5.1
母 親 は	家事の腕前	12.7	23.5	43.7	13.8	3.8	2.5
	専門的な知識	4.1	13.6	48.6	23.5	5.7	4.5
	社会人としての教養	6.3	22.5	53.5	13.9	2.5	1.3
	子どもへの愛情	23.0	36.9	32.9	5.8	0.9	0.5
	女性としての魅力	2.9	9.5	54.5	23.2	4.9	5.0
	服装のセンス	5.4	14.8	56.5	16.7	3.5	3.1

○は最頻値

(図4) 子どもの両親評価と親の推定

→ 子どもは親を高く評価している



2. 父のイメージ・母のイメージ

そこで、あらためて表15のように、AとBの対になる言葉を10対提示して、父と母のイメージを尋ねることとした。

結果は、表15の通りで、これを図化したのが、図5である。そして、こうした形で両親のイメージを尋ねると、図中のプロフィールのように、両親のイメージが重複しているのが明らかとなる。

子どもたちにとって、父親はむろんだが、母親も①仕事熱心で、②やる気があり、③健康的で、④頼りになる存在だという。そうした共通性の上に、体の丈夫な父、そして、教育熱心で口うるさい母というような両親の違いがうかんでくる。つまり、父と母との間に、多少の違いが認められるものの、そうした差異を越えて、父と母ともに、「やる気があって頼りがいがある」と思われているのが、現代の親のイメージとなる。

そして、親自身も自分自身を、やる気があり仕事熱心なおとなだと思っているのはたしかなようで、表16の通り、仕事の熱心さについて、父親の95%、母親の90%は、自分を熱

心なタイプだと答えている。

	父親	母親
1 仕事熱心	50%	> 35%
2 やる気がある	39%	> 31%
3 健康的	36%	> 27%
4 頼りになる	32%	> 17%
5 尊敬できる	21%	> 11%
6 心が暖かい	25%	≒ 26%
7 思いやりがある	27%	≒ 28%
8 やさしい	24%	> 16%
9 教育熱心	10%	≒ 9%
10 口うるさい	14%	≒ 16%

(絶対Aの割合)

そして、上記のように、父と母との違いは母と比べ、やる気や頼りがいがより増したのが父親という感じになる。そうした意味では父と母との間は、質の差というより、やる気や頼りがいについての量の差という感じが強い。

(表15) 父・母のイメージ

→ 共通性が多いのが目につく

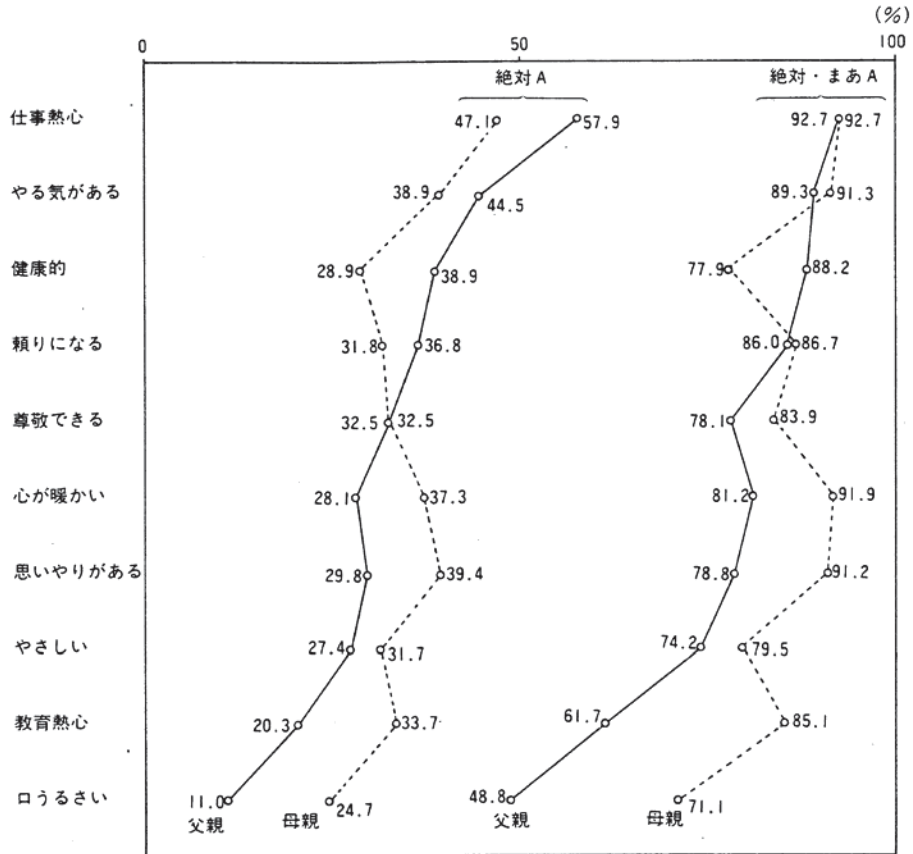
(%)

A	A		B		B		
	絶対	まあ	まあ	絶対			
父	仕事熱心	57.9	34.8	5.7	1.6	なまけもの	
	やる気がある	44.5	44.8	8.5	2.2	やる気がない	
	健康的	38.9	49.3	9.8	2.0	体が弱い	
	頼りになる	36.8	49.2	10.7	3.3	頼りない	
	尊敬できる	32.5	45.6	17.0	4.9	けいべつしたい	
	心が暖かい	28.1	53.1	15.6	3.2	心が冷たい	
	親	思いやりがある	29.8	49.0	16.4	4.8	自分勝手
		やさしい	27.4	46.8	20.5	5.3	きびしい
		教育熱心	20.3	41.4	31.1	7.2	無関心
		口うるさい	11.0	37.8	39.0	12.2	放任的
母	仕事熱心	47.1	45.6	6.5	0.8	なまけもの	
	思いやりがある	39.4	51.8	7.2	1.6	自分勝手	
	やる気がある	38.9	52.4	7.7	1.0	やる気がない	
	心が暖かい	37.3	54.6	6.9	1.2	心が冷たい	
	頼りになる	31.8	54.9	11.6	1.7	頼りない	
	教育熱心	33.7	51.4	13.0	1.9	無関心	
	親	尊敬できる	32.5	51.4	14.2	1.9	けいべつしたい
		やさしい	31.7	47.8	16.8	3.7	きびしい
		健康的	28.9	49.0	18.1	4.0	体が弱い
		口うるさい	24.7	46.4	23.3	5.6	放任的

○は最頻値

(図5) 父・母のイメージ

→ 共通性をふまえて、健康的な父、口うるさい母



(表16) 親自身の自己評価

→親自身も良い親だと思っている

(%)

A	A		B		B		
	絶対	まあ	まあ	絶対			
父	仕事熱心	49.6	45.2	4.7	0.5	なまけもの	
	やる気がある	39.4	54.0	6.0	0.6	やる気がない	
	健康的	35.7	54.4	8.5	1.4	体が弱い	
	頼りになる	31.6	57.7	9.6	1.1	頼りない	
	尊敬できる	21.4	62.5	14.5	1.6	けいべつしたい	
	心が暖かい	25.1	60.4	13.6	0.9	心が冷たい	
	親	思いやりがある	26.6	58.3	13.5	1.6	自分勝手
		やさしい	23.7	55.2	18.0	3.1	きびしい
		教育熱心	10.3	53.8	31.7	4.2	無関心
		口うるさい	14.4	48.9	31.8	4.9	放任的
母	仕事熱心	35.4	54.9	9.1	0.6	なまけもの	
	やる気がある	30.6	59.1	9.6	0.7	やる気がない	
	健康的	26.8	56.1	15.3	1.8	体が弱い	
	頼りになる	17.0	66.7	15.1	1.2	頼りない	
	尊敬できる	11.3	64.1	23.4	1.2	けいべつしたい	
	心が暖かい	25.5	62.2	12.1	0.2	心が冷たい	
	親	思いやりがある	28.3	58.5	12.6	0.6	自分勝手
		やさしい	15.8	56.4	25.0	2.8	きびしい
		教育熱心	8.7	59.3	30.2	1.8	無関心
		口うるさい	15.8	54.6	27.1	2.5	放任的

○は最頻値

3. 昔の親と今の親

このように子どもたちは、親たちを意欲的で頼れる存在として評価していた。そして親自身も、そうした親になろうとしているのはたしかなようだが、親たちには設問の仕方をかえて、自分の親ぶりを、自分の親、つまり、一世代前の親と対比させて、その変化を求めることにした。

表17が、一世代前の親——自分の親——についての評価だが、これではわかりにくいと思うので、現在の自分の親ぶりと自分の親とを対比して示すと、図6となる。

この図をどう解釈したらよいかはむずかしいが、図の示す結果をそのまま要約するなら、父親は、昔の父も、今の父もさほどの変化を示していない。しかし、母親は、昔のほうが、やる気があり、健康的で、頼りがいが

あったという。

もっとも、もう少し細かく父親像の変化を求めると、表18のようになる。

昔の父のほうが そうだった属性	{	1 押し通す力
		2 一目おかれる見識
		3 仕事一途
		4 圧倒するような力
		5 子どもを一人前扱い
今の父のほうが そうなった属性	—	子ぼんのうで やさしい

したがって、一世代前の父と比べ、仕事の一途さや圧倒するような力は減ったが、子ぼんのうさや、やさしさが増したのが現代の父親像となるのであろう。

(表17) 一世代前の親——親たちにとっての親——

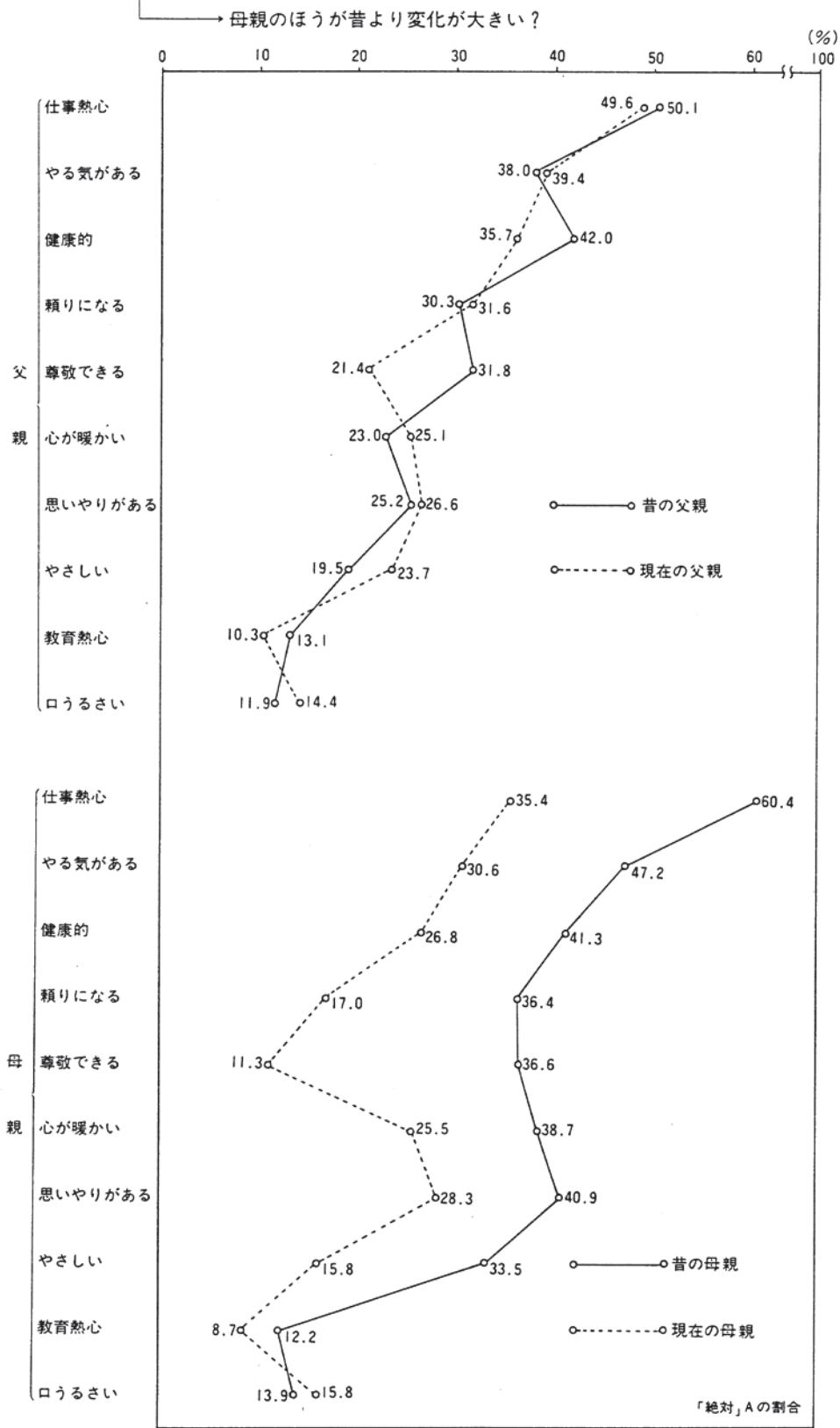
→ もっと仕事熱心だった

(%)

	A	A		B		B
		絶対	まあ	まあ	絶対	
父	仕事熱心	50.1	39.5	9.0	1.4	なまけもの
	やる気がある	38.0	50.2	9.9	1.9	やる気がない
	健康的	42.0	45.3	9.5	3.2	体が弱い
	頼りになる	30.3	53.1	14.2	2.4	頼りない
	尊敬できる	31.8	53.3	13.1	1.8	けいべつしたい
	心が暖かい	23.0	57.4	18.0	1.6	心が冷たい
	思いやりがある	25.2	53.9	17.1	3.8	自分勝手
	やさしい	19.5	45.6	24.9	10.0	きびしい
	教育熱心	13.1	40.6	34.5	11.8	無関心
	口うるさい	11.9	39.2	37.1	11.8	放任的
母	仕事熱心	60.4	33.0	5.9	0.7	なまけもの
	やる気がある	47.2	44.4	7.7	0.7	やる気がない
	健康的	41.3	41.4	11.4	5.9	体が弱い
	頼りになる	36.4	49.1	11.6	2.9	頼りない
	尊敬できる	36.6	50.1	12.4	0.9	けいべつしたい
	心が暖かい	38.7	50.7	9.9	0.7	心が冷たい
	思いやりがある	40.9	47.5	10.3	1.3	自分勝手
	やさしい	33.5	46.3	16.4	3.8	きびしい
	教育熱心	12.2	40.2	36.1	11.5	無関心
	口うるさい	13.9	44.2	35.1	6.8	放任的

○は最頻値

(図6) 昔の親と今の親



(表18) 昔の父と今の父(父親の評価)

→やさしさを増した

(%)

	今の父			昔の父		
	そう		小計	そう		小計
	とても	わりと		とても	わりと	
一度言い出したら押し通すガムコさがある(あった)	9.9	31.1	41.0	22.9	35.1	58.0
一目おかれるような高い見識がある(あった)	8.5	24.3	32.8	16.8	25.3	42.1
家庭に無関心で仕事一途である(あった)	3.9	15.8	19.7	12.2	26.5	38.7
家族を圧倒するような力がある(あった)	6.3	16.3	22.6	15.8	22.3	38.1
子どもを一人前扱いして見守るタイプである(あった)	5.1	22.4	27.5	9.6	25.4	35.0
自分の考えを信念をもって押しつける(つけた)	6.2	22.0	28.2	9.1	19.4	28.5
子ほんのうでやさしさがある(あった)	9.8	30.2	40.0	8.2	17.4	25.6
体面を大事にしツツパッている(いた)	3.3	12.8	16.1	7.3	13.8	21.1

とても わりと まあ あまり まったく
 そう そう そう そうでない そうでない
 1 2 3 4 5
 (%)

4. 親の助言は役立つか

もう一度、現代の親子関係に問題をしばらく。一世代前と比べ、父親のやさしさが増し、母親も頼りがいが乏しくなったとはいっても、それはあくまで、親自身の気持ちの問題であって、子どもたちの目には、現代の親たちは頼りがいがあり、尊敬できる存在としてうつっている。

そうした子どもたちの気持ちは、表19のような結果となってあらわれている。父や母の助言は役立つかについて、子どもたちは、進学する高校を決めたり、卒業後の進路、そして、つとめ先などを決めるときに父の助言は

むろんのこと、母の助言もかなり役立つと答えている。そして、「やや役立つ」を含めると、すべての項目で、子どもたちは親の助言の有効性を認めていることにもなる。

もちろん、助言が役立つと思えるのは、親たちの権威を認めている証しとなるので、この結果と今までのデータとを重ね合わせると、子どもたちは親に、物質面ではむろんのこと、頼りがいがあるだけに精神面でも依存している。そうした意味では、反抗期を成り立たせる基盤そのものが形づくられていないと要約できるように思える。

(表19) 助言は役立つか

→父はむろん、母の助言も役立つ

(%)

		役 立 つ			や や 役 立 つ	役 立 た な い		
		と っ ち	か な り	小 計		あ ま り	ま っ た く	小 計
父 親 の 助 言	部活動をやめる	15.2	20.0	35.2	30.9	23.9	10.0	33.9
	勉強の仕方がわからない	21.5	18.4	39.9	26.5	22.4	11.2	33.6
	進学高校を決める	24.0	30.7	54.7	29.5	11.0	4.8	15.8
	卒業後の進路	27.3	31.4	58.7	27.5	9.2	4.6	13.8
	つとめ先を決める	31.5	32.5	64.0	24.2	8.0	3.8	11.8
	結婚相手を決める	13.0	18.5	31.5	32.8	23.1	12.6	35.7
母 親 の 助 言	部活動をやめる	21.7	26.6	48.3	30.2	14.7	6.8	21.5
	勉強の仕方がわからない	16.2	20.5	36.7	31.4	23.3	8.6	31.9
	進学高校を決める	27.1	32.8	59.9	30.6	7.0	2.5	9.5
	卒業後の進路	26.6	34.2	60.8	29.1	7.0	3.1	10.1
	つとめ先を決める	27.1	30.8	57.9	29.9	9.5	2.7	12.2
	結婚相手を決める	22.0	23.5	45.5	30.5	15.7	8.3	24.0

○は最頻値

第IV章 親子関係の変化



1. 父親との関係の推移

このように、中学生の親子関係は、親の権威を信頼し依存する形をとっており、小学生時代を思い起こさせるものであった。したがって、そうした意味では、反抗するきざしすら見だしにくい感じがする。

そこで、反抗がもっともシャープな形をたどりやすい父と子との関係にしぼって、父とうまくいっているかどうかを、小学校低学年のころから、現在、そして、結婚するまでの未来にかけてあとづけたのが、表20である。

小計の欄からうかがえるように、さすがに小学校低学年の場合、父親との関係が「とても」「かなり」うまくいっていた者が7割に達する。しかし、小学校高学年の6割を経て、現在、親との間がうまくいっている者は、「と

ても」「かなり」に限ると、55%である。そして、これから先について、うまくいっている者は、4割を上回る程度にとどまっている。したがって、小学生のころのような親子の密着した形に戻ることはできない。しかし、そうかといって、それは父との関係が悪化するのではなく、やや距離をおくだけにすぎないように思える。事実、「やや」を含めると、8割近い子どもたちが、父との関係は、過去はむろんのこと、現在、そして、未来もうまくいこうと思っている。

したがって、子どもたちは親子関係が、多少のクールさを帯びるにしても、将来ともに、現在の円満さを保つとみているのはたしかなようだが、ここで、表21に目をとめてほしい。

「親のようなおとなになりたいか」について、全体としてみると、なりたくないと思っている子は2割にすぎない。したがって、親に対する頼りがいが、親のようになりたいという気持ちにもあらわれているとも考えられる。しかし、表21の学年差に注目すると、

中1 中2 中3
 親のようになりたい 51% > 45% > 35%
 なりたくない 13% < 21% < 29%
 となる。つまり、学年が上がるにつれて親への同一視へ疑問を感じる子が増加しはじめて

(表20) 父親との関係

→ やや冷たさを増しはじめた

(%)

項目	尺度	うまくいっていた(いくだろう)			やや うまく	うまくいかなかった(いかないだろう)			
		とても	かなり	小計		やや	あまり	ぜんぜん	小計
過去	小学低学年	40.5	30.2	70.7	23.0	3.3	1.5	1.5	6.3
	小学高学年	29.2	30.9	60.1	29.6	6.1	2.7	1.5	10.3
	中学生になって	27.2	26.8	54.0	29.6	7.8	4.8	3.8	16.4
現在		28.0	26.5	54.5	32.0	5.7	4.1	3.7	13.5
未来	高校入学	20.1	23.6	43.7	36.5	9.9	5.4	4.5	19.8
	高校卒業	19.7	24.6	44.3	34.5	10.3	6.4	4.5	21.2
	20歳ぐらい	21.4	24.3	45.7	33.5	10.8	5.5	4.5	20.8
	結婚するころ	22.9	22.8	45.7	32.0	10.3	5.6	6.4	22.3

(表21) 親のようになりたいか

→ 中1の51%から中3の35%へ

(%)

学年・性別	尺度	なりたい		どちらとも	なりたくない	
		とても	わりと		あまり	ぜんぜん
学年	中1	21.4	30.0	35.8	7.9	4.9
	2	17.8	27.5	33.7	13.2	7.8
	3	9.6	24.9	36.8	17.6	11.1
性別	男子	13.8	26.2	36.4	14.4	9.2
	女子	18.5	28.8	34.3	11.6	6.8
全体		16.1	27.4	35.4	13.1	8.0

2. 学年による変化

それと同じ傾向が、表22からもうかがえよう。「もう一度生まれ変われたら、今の家に生まれてきたいか」について、全体としてみると、「生まれてきたい」者が45%に達する。しかし、学年別に集計すると、「わりとそう思う」を含めて、今の家に生まれてきたい者は、中1の56%から、中2の45%を経て、中3では36%へと減少している。

こうした表21や表22を手がかりにすると、現代の中学生が親に依存しているといっても、それはトータルとしてとらえた場合のことで、中学生も、中1から中2、そして、中3となるにつれて、親への絶対視が薄れる傾向がうかがえよう。

さらに、表23は、先にふれた親の助言が役立つかの結果だが、これを学年差に注目して図化すると、図7の通りとなる。つまり矢印のベクトルの示す通り、中3の場合、親の助言に疑問を抱く子どもたちが増加しているのが目につく。具体的にいえば、部活動をやめ

るときに、中1の場合、47%は父の意見、そして、62%は母の意見が役立つと思っていた。しかし、中3になると、それぞれ25%、27%ずつ、減少して、役立つと思える割合が父については22%、母は35%となるという変化である。

そして、表24(図8)は、両親についてのイメージの学年別の変化をたどったものだが、父と母のイメージがともに低下しているのは、数値の変化となってははっきりとあらわれている。

もっとも、表25(図9)によると、両親のイメージが低下しているといっても、父親のもつ仕事への意欲や専門の知識、あるいは、母親の愛情などについては、学年が上がってもそれほどの評価の低下が生じていない。それだけに、学年が上がったからといって、子どもたちがすべての面で、親を批判的に見るようになるとみなすのは早計であろう。

(表22) 今の家に生まれてきたいか

→中1の56%から中3の36%へ

学年・性		尺 度		どちらとも	そう思わない	
		そ う 思 う			あ ま り	ぜ ん ぜん
		と とも	わ り と			
学 年	中 1	34.8	21.0	29.3	11.0	3.9
	2	21.6	23.4	30.3	14.3	10.4
	3	16.0	19.8	35.5	16.5	12.2
性	男 子	22.2	21.0	30.9	16.9	9.0
	女 子	25.5	21.9	32.8	10.8	9.0
全 体		23.8	21.4	31.8	14.0	9.0

(表23) 親の助言は役立つか

→役立つと思えなくなる

(%)

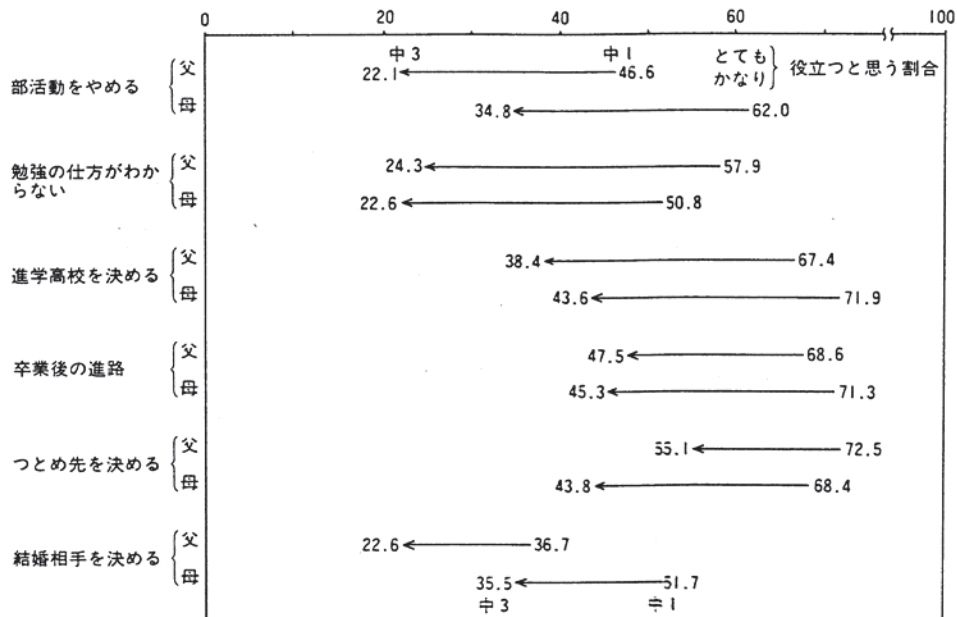
		学 年			性	
		中 1	中 2	中 3	男 子	女 子
父 親 の 助 言	部活動をやめる	46.6	37.9	22.1	37.9	32.0
	勉強の仕方がわからない	57.9	39.1	24.3	39.1	40.6
	進学高校を決める	67.4	59.4	38.4	55.4	54.0
	卒業後の進路	68.6	61.0	47.5	59.7	57.5
	つとめ先を決める	72.5	65.1	55.1	65.6	62.0
	結婚相手を決める	36.7	35.7	22.6	31.4	31.6
母 親 の 助 言	部活動をやめる	62.0	49.7	34.8	43.6	53.7
	勉強の仕方がわからない	50.8	38.1	22.6	36.7	36.8
	進学高校を決める	71.9	65.3	43.6	54.5	66.0
	卒業後の進路	71.3	66.5	45.3	53.8	68.6
	つとめ先を決める	68.4	62.2	43.8	49.5	67.1
	結婚相手を決める	51.7	49.7	35.5	39.0	52.8

「とても・かなり」役立つと思う割合

(図7) 親の助言が役立つか×学年

→それほど役立つとは思えなくなる

(%)



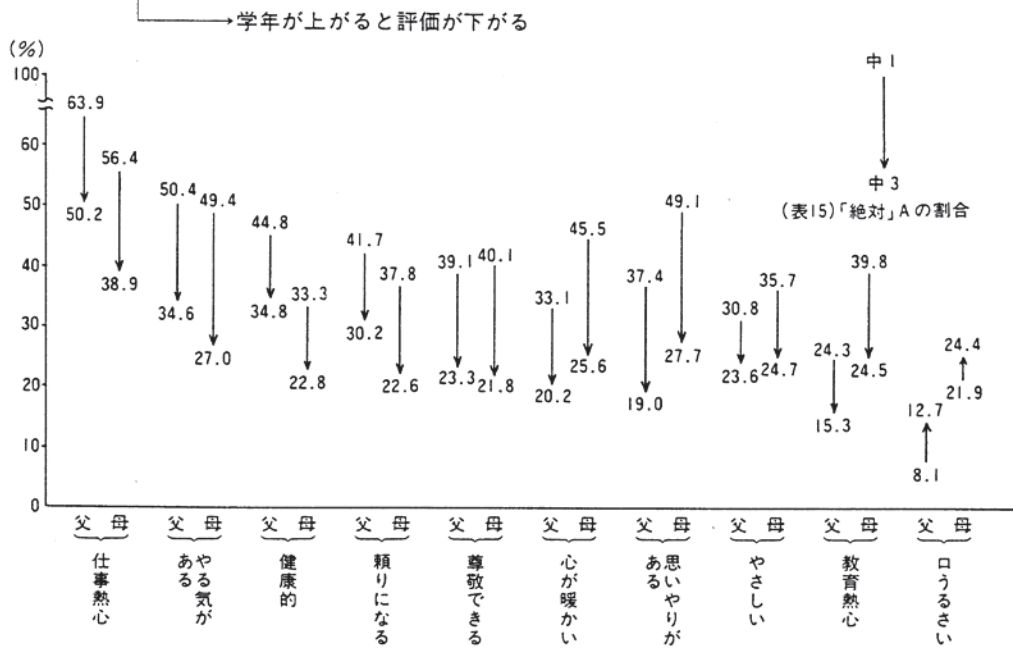
(表24) 両親のイメージ×学年・性

(%)

		学 年			性	
		中 1	中 2	中 3	男 子	女 子
父 親	仕事熱心	63.9	60.0	50.2	57.4	58.2
	やる気がある	50.4	49.0	34.6	42.8	46.5
	健康的	44.8	37.7	34.8	39.5	38.3
	頼りになる	41.7	38.9	30.2	37.4	36.0
	尊敬できる	39.1	35.5	23.3	31.8	33.2
	心が暖かい	33.1	31.5	20.2	24.9	31.7
	思いやりがある	37.4	33.5	19.0	27.0	32.8
	やさしい	30.8	28.3	23.6	24.0	31.4
	教育熱心	24.3	21.8	15.3	20.2	20.5
	口うるさい	8.1	11.9	12.7	10.9	11.2
母 親	仕事熱心	56.4	49.0	38.9	42.0	52.8
	やる気がある	49.4	41.3	27.0	33.7	44.8
	健康的	33.3	31.1	22.8	26.6	31.5
	頼りになる	37.8	35.5	22.6	25.1	39.2
	尊敬できる	40.1	36.3	21.8	27.2	38.4
	心が暖かい	45.5	41.7	25.6	32.8	42.5
	思いやりがある	49.1	42.4	27.7	35.2	44.1
	やさしい	35.7	35.1	24.7	27.6	36.1
	教育熱心	39.8	37.4	24.5	32.5	35.2
	口うるさい	21.9	27.3	24.4	24.0	25.5

(P.25表15) 表中の「絶対」Aの割合

(図8) 両親のイメージの学年別変化



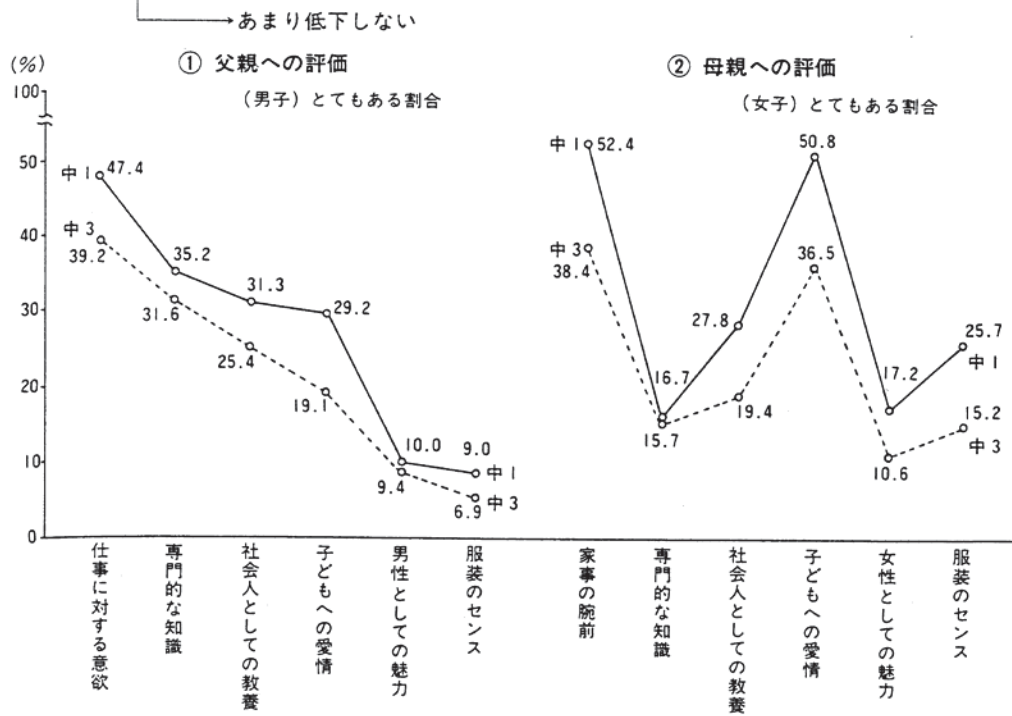
(表25) 両親に対する評価×学年・性

(%)

		男 子			女 子		
		中 1	中 2	中 3	中 1	中 2	中 3
父 親	仕事に対する意欲	47.4	43.7	39.2	50.5	44.2	43.4
	専門的な知識	35.2	33.9	31.6	31.2	30.0	21.5
	社会人としての教養	31.3	29.8	25.4	33.5	30.9	25.5
	子どもへの愛情	29.2	27.9	19.1	38.2	33.5	25.1
	男性としての魅力	10.0	8.3	9.4	8.8	6.2	3.6
	服装のセンス	9.0	5.7	6.9	10.8	7.0	5.6
母 親	家事の腕前	45.3	33.8	25.6	52.4	41.0	38.4
	専門的な知識	17.6	15.5	9.8	16.7	20.1	15.7
	社会人としての教養	21.5	18.2	14.5	27.8	28.2	19.4
	子どもへの愛情	33.6	31.7	19.7	50.8	43.4	36.5
	女性としての魅力	10.9	7.4	4.9	17.2	14.2	10.6
	服装のセンス	10.9	11.7	9.1	25.7	19.2	15.2

「とても」ある(良い)割合

(図9) 両親に対する評価の学年別変化



3. 親の力を越えられるか

学年差に伴うこうした変化を視野へ入れると、中学生たちが、親と仲むつまじく暮らしているといっても、それは、中学1年生のことで、中学3年生になれば、親の権威を否定し、その結果として、第二次反抗期が生じてくるとも考えられる。そうなる、これまでふれてきた傾向は、第二次反抗期のあらわれが、従来より2~3年遅れたための現象としてとらえることも可能になる。

そうした可能性を維持したいと思い、表26を作成してみた。この表は、親の力を越えたと思うかを尋ねたものだが、最頻値に○印を付したので明らかなように、全体として、親の力を越えていないのを自覚している子どもが多い。

半数以上の者が越えた
 と思っているもの { 1 母親の体力
 2 母親の英語の力
 4割以上の者が越えた
 と思っているもの { 1 母親の数学の力
 2 父親の英語の力

の結果が示す通り、子どもたちは、勉強の力で親を越えたと思っているものの、その他の面では親を越えられそうにないと思っている。

そして、表27によると、親たちも、子どもは自分の力を越えていないと答えている。したがって、親と子との評価のずれを対比させた表28の結果でも、親の感じ方と子の気持ちとが、ほぼ一致した傾向を示している。

あらためてふれるまでもなく、反抗が、対象に対する反発から生じることはたしかであ

ろうが、それと同時に、そうした対象を実力的に越えられそうという気持ちが反抗を顕在化させるものであろう。しかし、表26～27の結果では、子どもたちは親をととも越えにくいと思っていた。これでは、親に対する反抗は気分的な反発の範囲にとどまり、反抗の形で顕在化しにくくなる。

しかし、中1から中3へ、学年が上がるにつれて、親の権威を否定的にとらえる態度が目立っていた。そうだとすると、親の力との関連でも、親の力を越えたと思っている中学3年生が多いとも考えられる。

表29(図10)から明らかなように、体力や英語・数学などの学力の面では、中1から中

(表26) 両親を越えられるか

→父も母も越えにくい

(%)

		越 え た				いずれ越える			ず っ と 越 え ら れ な い
		小 学 高 学 年	中 学 に 入 り	こ の ころ	小 計	高 校 生	20 歳 ぐ ら い	25 歳 ぐ ら い	
父 親 に	英語の力	2.6	21.9	17.3	41.8	31.8	9.4	5.0	12.0
	数学の力	4.9	11.4	14.1	30.4	32.4	11.6	8.1	17.5
	体 力	2.7	8.8	11.2	22.7	34.0	14.9	9.5	18.9
	人とのつきあい方	4.9	5.4	9.3	19.6	22.7	24.2	18.0	15.5
	がんばる力	2.0	5.0	10.2	17.2	30.1	18.7	15.9	18.1
	社会常識	1.2	2.8	3.4	7.4	16.2	26.9	30.5	19.0
	社会についての見方	0.7	1.9	3.9	6.5	15.3	25.2	30.2	22.8
	お金をかせぐ力	0.9	1.1	1.7	3.7	4.4	16.7	44.7	30.5
母 親 に	英語の力	3.7	28.9	23.1	55.7	27.5	7.1	3.9	5.8
	数学の力	7.8	18.6	18.3	44.7	31.6	9.7	6.1	7.9
	体 力	21.5	25.8	24.5	71.8	17.3	5.4	3.1	2.4
	人とのつきあい方	3.6	5.4	9.2	18.2	25.5	24.8	16.2	15.3
	がんばる力	3.4	6.1	10.8	20.3	31.0	17.7	15.9	15.1
	社会常識	1.0	2.9	6.2	10.1	20.8	29.6	25.8	13.7
	社会についての見方	1.2	2.6	4.2	8.0	18.1	30.5	27.9	15.5
	お金をかせぐ力	0.8	1.2	1.5	3.5	9.6	32.7	39.3	14.9

○は最頻値

3へなるにつれて、親を越えたと思う子の割合が増加している。しかし、「人とのつきあい方」や「がんばる力」、「社会常識」などは、中3になっても、いっこうに親を越えたという感じがあらわれていない。そして中には、がんばる力や人とのつきあい方の父親の場合のように、中3になって、かえて数値

の下降した項目も見受けられる。これは、成長するにつれてかえて、親の力強さを再認識したのであろうか。これでは、親の偉大さを認めていることで、反抗はむしろ鎮静化していかざるをえまい。

(表27) 子どもは親を越えたか(親の評価)

(%)

		越 え た				い ず れ 越 す			ず っ と 越 え そ う に な い
		小 学 高 学 年	中 学 に 入 り	こ の ころ	小 計	高 校 生	20 歳 ぐ ら い	25 歳 ぐ ら い	
父 親 自 身	英語の力	2.3	24.9	16.2	43.4	37.6	9.1	2.4	7.5
	数学の力	4.8	16.9	13.7	35.4	41.2	8.3	3.3	11.8
	体 力	1.3	8.9	8.3	18.5	40.8	15.6	6.9	18.2
	人とのつきあい方	2.8	6.0	6.6	15.4	22.2	25.0	22.6	14.8
	がんばる力	2.0	9.7	7.1	18.8	32.5	18.5	15.2	15.0
	社会常識	0.6	3.3	3.8	7.7	19.2	27.1	29.2	16.8
	社会についての見方	0.7	3.4	2.3	6.4	20.6	24.9	28.8	19.3
	お金をかせぐ力	0.5	1.6	0.9	3.0	5.4	17.0	38.4	36.2
母 親 自 身	英語の力	3.4	43.7	18.7	65.8	27.8	2.1	0.6	3.7
	数学の力	13.0	31.0	19.9	63.9	30.0	1.7	0.5	3.9
	体 力	11.1	35.7	20.2	67.0	25.1	3.7	1.2	3.0
	人とのつきあい方	6.1	10.4	9.1	25.6	25.5	23.7	17.3	7.9
	がんばる力	5.9	17.7	11.6	35.2	39.9	10.9	7.7	6.3
	社会常識	1.5	7.4	5.8	14.7	29.0	30.4	19.7	6.2
	社会についての見方	1.5	7.8	5.0	14.3	31.4	29.5	19.0	5.8
	お金をかせぐ力	0.5	1.9	1.2	3.6	6.2	39.7	44.2	6.3

○は最頻値

(表28) 親を越えたか(親と子のずれ)

→ 親の感じ方と子の見方との間に差が少ない

(%)

	父 と 子			母 と 子		
	子どもの 評 価	父自身の 評 価	差	子どもの 評 価	母自身の 評 価	差
英語の力	41.8	43.4	1.6	55.7 <	65.8	10.1
数学の力	30.4 <	35.4	5.0	44.7 <	63.9	19.2
体 力	22.7 >	18.5	4.2	71.8 >	67.0	4.8
人とのつきあい方	19.6 >	15.4	4.2	18.2 <	25.6	7.4
がんばる力	17.2	18.8	1.6	20.3 <	35.2	14.9
社会常識	7.4	7.7	0.3	10.1	14.7	4.6
社会についての見方	6.5	6.4	0.1	8.0 <	14.3	6.3
お金をかせぐ力	3.7	3.0	0.7	3.5	3.6	0.1

子どもの力が親を越えたと思う割合

(表29) 親を越えたか×学年

→学力面だけは越えているが

(%)

		中 1			中 2			中 3		
		親を越えた		小 計	親を越えた		小 計	親を越えた		小 計
		中学まで	このごろ		中学まで	このごろ		中学まで	このごろ	
父 親 に	英語の力	19.0	14.8	33.8	24.6	17.0	41.6	29.4	19.9	49.3
	数学の力	13.1	13.4	26.5	16.7	12.7	29.4	18.8	16.3	35.1
	体 力	7.1	7.8	14.9	10.9	11.8	22.7	16.0	13.5	29.5
	人とのつきあい方	12.2	8.4	20.6	9.4	11.1	20.5	9.6	8.2	17.8
	がんばる力	7.3	10.6	17.9	6.6	11.2	17.8	7.1	8.9	16.0
	社会常識	4.6	2.3	6.9	3.1	4.4	7.5	4.4	3.4	7.8
	社会についての見方	2.8	2.5	5.3	2.2	4.7	6.9	2.9	4.3	7.2
	お金をかせぐ力	2.5	2.0	4.5	1.3	1.5	2.8	2.2	1.6	3.8
母 親 に	英語の力	23.7	20.0	43.7	31.5	26.3	57.8	41.9	22.6	64.5
	数学の力	21.1	15.4	36.5	25.2	19.1	44.3	32.4	20.2	52.6
	体 力	35.5	25.8	61.3	48.3	25.3	73.6	56.9	22.4	79.3
	人とのつきあい方	9.3	8.8	18.1	8.2	7.3	15.5	9.8	11.6	21.4
	がんばる力	8.4	10.6	19.0	10.6	9.7	20.3	9.5	12.2	21.7
	社会常識	3.2	5.7	8.9	4.6	6.6	11.2	3.8	6.3	10.1
	社会についての見方	3.2	2.5	5.7	4.0	3.8	7.8	4.0	6.1	10.1
	お金をかせぐ力	2.9	2.2	5.1	1.1	1.1	2.2	2.0	1.3	3.3

(図10) 親の力を越えたか×学年

→ 中3になっても親を越えにくい

